

## 5. Tulln の病院に見る Company Mobility Management

トピック：ある病院を舞台にした大掛かりな通勤手段改善の試み（オーストリア）

特徴

自動車通勤をする従業員の割合が高いことに着目し、広く病院業務活動に伴って排出される CO<sub>2</sub> の排出を削減すべく、自動車ユーザーの前向きな動機に訴え、問題意識を喚起してゆく手法により、病院の輸送管理体制改善（従業員の通勤手段の抜本的改革）に成功し

<プロジェクトの背景と意義>

オーストリアで最も人口密度は低い、自動車の保有率が最も高い Tulln 市は、環境アセスメントの調査を実施する絶好の地域であるが、調査の結果、そこにある Tulln シティー病院では、病院業務に伴う輸送活動が、病院全体の排出する CO<sub>2</sub> の大部分を占めていることが判明した。

こうした CO<sub>2</sub> の排出を削減すべく、同国の「'Soft Mobility Partnership'プログラム」の主催により、病院の輸送管理体制改善を目指すプロジェクト(mobility management project)を開始した。

80 の近隣地域からスタッフが通勤し、24 時間営業を行い、週末も休まず営業しているため、この病院こそが公共交通機関利用を促進する足がかりとなることが期待された。こうした一筋縄には行かない背景があり、プロジェクトの第一段階では、Tulln 市に住んでいる病院スタッフの中で、徒歩や自転車で通勤する人々の割合を高めようとすることに重点がおかれた。

この段階での効果は目覚しく、車を使わずに通勤する人の割合は 50% から 69% へと上昇し、同時に、車で通勤する人の割合も 60% から 57% へとわずかな減少を示した。

買い物や店の使い走りのための車の利用や、あるいは商品の搬送に用いる軽車両の利用にまで対象を広げた第二段階では、さらに大きな成功を収めたものの、右の病院営業の体制に伴う困難性は依然として頭をもたげている。

<特色>

本プログラムの重要な特色の一つには、自動車利用制限に対する自発的なアプローチが挙げられる。すなわち、駐車禁止などの手段を講じるのではなく、自動車ユーザーの前向きな動機に訴え、問題意識を喚起してゆくという手法を採用した。

<意義・成果>

本プログラムが成功を収めたことで右の手法の正当性が証明された。また、病院という組織体が、組織を挙げての移動手段（通勤手段）の改善戦略を実践する場へと変貌しうることを広く示した。

・(仮訳)

・(出典)Synthesis Report of the OECD project on Environmentally Sustainable Transport EST presented on occasion of the International est! Conference 4th to 6th October 2000 in Vienna, Austria.